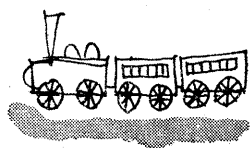


旅・発達(三)

十年以上前から、私は、たまたま子どもの描画を集めはじめた。そのときには、それがどういう意味をもつものか、よくわからなかったのであるが、子どもたちが熱心におもしろく遊んでいるときに作られた描画を、たとえ、紙の切れはしにかかれた数本の線であっても、捨てるのに忍びがたくて、日付けをいれてとっておいた。そうすると、文字で書きのこした記録よりも、子どもが描いた一本の線が、そのときの情景をそのままに伝えてくれることが多いのである。そのときに自分が書いた記録を、あとでよみ返しても、要領を得なかったことが、そのときに子どもが描いた一本の線によって、情景がいきいきとよみがえってくる。子どもが遊んでいる最中に、自分から描いた線には、そのときの子どもの感情がこめられており、子どもの描画は、子ども自身が残した記録といえるであろう。だから、後になって、子どもの描画をとり出してみると、そのときには自分が気が付かなかったさまざま



津 守 真

まなことが、その一枚の紙片を通して伝わってくる。こうして集積された描画が、同じ子どもについて、長年の間に数千枚になったのであるが、私は、その子どもの描画から、逆に、子どもの発達を考える試みをしてみた。その際に、描画技術の変化などを分析的に研究する考え方もあるが、それでは、子ども自身がそこで線によって直接にあらわさざるを得なかったものを失うことになると考え、描画を、そのときに子どもが感じていた世界の表現として見るという考えをとった。そうしてみると、たとえば、(他のところでも書いたことであるが)、描画の段階で、もつれた糸玉のような線のかたまりから、次第に糸がほどけて、中心のあるうすまき画へと変化していく描画の過程は、そのままに、その子どもが、精神的に混沌とした状態から、中心をもつて統合された世界を見いだしてゆく過程に対応するのであることを見ることができる。また、別の子どもについていうと、幼稚園で張り切っ

た充実した生活ができるようになる、それまで家の内部のテーマが多かった描画が、家の外に出ていく外出のテーマにかわっていく。同じ子どもについて、縦断的にみていくと、こういうことは、かなりたしかに言えることである。そのことを証する多くの事実や議論が必要になるが、ここではこれ以上、立ち回らないことにする。私は、こうして、子どもの描画をみることから、子どもの行動の見方一般について、見方の転回をせぬばならなくなった。子どもの描画は、子ども自身の世界から切り離されて存在するものではなく、子どもの世界の表現である。私どもは、子どもの描画を通して、子どもの世界にふれることができるのである。同様に、子どもの示す行動は、(表情も、身体の動きも)子どもの世界の表現である。ところが、しばしば私どもは子どもの行動の表面にあらわれたところだけを切り離して見て、それを自分のもっている規準に照してみる。そういうところから、困った行動というような見方も出てくる。それでは、変化していく子どもの世界の一相であることを見失うことになる。保育者は、子どもの示す行動の背後には、子どもの世界があることを心得ていて、一段階、ゆとりをもって、子どもに接しているのだと思う。ここでも、保育者は、子どもの世界と大人の世界を両方に足をかけて立つ中間的存在であると思う。

モントリオールの国際学会で、私は、ここに記したような描画研究をもとにして、一事例の特殊性と普遍性との問題について論じた。(保育研究においては、ある一日のある子どもたちのことが課題になることが多く、普遍性との関連は、重要な問題である)私の観点については、批判もあったが、また、肯定的な激励をも得た。また、私自身気がついたのであるが、前回に述べたように、伝記的研究という、長期の人間の全体に関する問題においては、行動面にとどまらず、その人の体験的世界を問題にしないわけにはいかないのである。行動の見方について、根本的な課題を投げかけている興味深い分野であると思った。

モントリオールの街は、古い建物と新しい建物とが混り合っている都市であり、マウント・ロイヤルという緑の楓の美しい小高い山の麓にある。一番古い部分の街は、現在の街の中央部からやはずれたところであり、セント・ローレンス川に沿っている。地下鉄で十五分位で行くことができる、シンボジウムを終えて、翌日、さっそく訪れた。ごく狭い範囲の一角で、見るからに港街という感じである。中央に石だたみの広場があり、その周囲には、バルコニーでコーヒーやビールを飲みながら人々が歓談しているヨーロッパ風の小さな店が並んでいる。中央のベンチには、

上半身裸の若者たちが夏の日光を楽しんでいる。その広場をめぐって、古い道路と石造りの建物が町をつくっている。その中に、壮麗なノートルダム寺院と、やや小さいが堅固な感じのボン・スクール・チャペルがある。このチャペルは、一六五七年に、フランスから、修道女マルグリット・ブルデオが来て建てたものである。よほど、この人々に尊敬された人らしく、チャペルのわきに、この人の一生を数十場面のパノラマにして展示してある。ガラスのケースに、小さな人形と風景を配列して、この人が、長い航海の後に、セント・ローレンスリバーに沿ったここ上陸し、酷寒の気候と闘いながら街をつくっていった人々の精神的な支柱となっていたありさまが示されている。子どもたちを集めて学校を開き、また、病人を看護している場面が数々ある。街全体が石のかたまりのような印象をうけるのは、一年の半分以上を雪と氷に閉ざされたところで、外界から身を守らねばならなかった生活を示すものであろう。その中で、子どもたちの生活に満足や喜びを与えていくのは大変なことだったろうと思う。マルグリットが子どもたちと共に踊っている場面、編物を教えている場面など印象深い。そういうところで、伝染病が発生したときなどは、どんなであつたらうか。礼拝堂の美しいヴィトローに囲まれた内陣の中に、私は、木彫りの素朴な人形がいくつかあるのに気がついて

近寄ってみた。大きな目とあらけずりの表情が印象的である。よく見ると、腕に子どもを抱いている。裏側にまわってみると、文字が刻んであつた。「主よ、なぜに私の赤ん坊をとり去り給うたのですか。主が必要とされたのである」と記されていた。マルグリットの一生のパノラマの中の、伝染病の人々を看護する場面と結び合わせて、私はいろいろな想像してみた。いまでこそ、国際観光都市として繁華な街であるが、このような開拓者の精神的伝統は、この近代的繁華さの中にも、どこかにひそんでいるに違いないと思う。そこまで知り得るほどの期間滞在できなかったことを残念に思つた。このボン・スクール・チャペル（スクールは救済という意味である）の礼拝堂の素朴な木彫は、私にとって、ノートルダム寺院の壮麗なチャペルよりも、遙かに貴重なもの思へた。私はここで、マルグリットの肖像をほめこんだ小さなベンダントを、娘の土産に買った。

モントリオールの賑やかな地域を通り抜けてしばらく歩くと、三階建てくらい古い煉瓦造りのアパートメントハウスがつづいている街並木の地域がある。上層階の窓まで、半円形のバルコニーが突き出していて、夕方になると、人々がそのバルコニーに椅子を出して腰かけている。学会の一日の日程が終ると、私はこういう並木路をよく歩いた。そういうとき、一階の戸口の石段に、子

どもたちが人形やままごと道具を持ち出して、歩道にまではみ出して遊んでいるところにゆき当たったことがある。若い父親が戸口の石段に腰を下して、子どもたちの遊んでいるところを見ている。そういうところでは、私はできるだけゆっくり歩いた。子どもの遊ぶかたわらで、子どもの遊びをたのしむ父親は、どこにいてもきつと思つた。

モントリオール学会が終わると、すぐ翌日に私は米国の中西部のミネソタ州に飛んだ。シカゴで乗換えて、わずか五時間ほどで、ミネアポリスに着く。ここは、私が二十年前に大学で勉強していた土地であり、親しい友人がたくさんいる。三年前に十八年ぶりで訪れたときには、一晚、友人たちが皆集つて、再会を喜んでくれた。今回は三度目の訪問なので、前回のような劇的な感激ではなかったが、互いに存在をたしかめあう喜びがあった。空港にN氏夫妻のこやかな顔を見たときには、長い間会わなかったことは忘れて、毎日顔を合せているかのような気がした。N氏夫妻には、二十年前とかわらない容貌と雰囲気があるが、氏の家に着いて、娘さんのメアリーアンが一歳半になる子どもと共に迎えに来てくれた時には、年月の経過を思わされた。私がN氏夫妻の家に泊っていたころ、メアリーアンは三歳で、両親の外出したと

きには、私がいつも一緒に遊んでから、ベッドにつれていったのである。いまはその子どもがほぼ同じ年齢になっている。一歳半のナタニエルは、床の上でボールをころがしたり、物を投げたりするのが好きである。私が床に腰をおろして相手をする、キャッチャッと声を上げて、私のひざによじ上ってくる。そして何度も何度も同じことをくりかえす。際限なくつづけるつもりになって相手をしていると、この位の年齢の子どもは、すぐに仲よしになれる。二十年前にも、メアリーアンと同じ床の上で同じようにして遊んだことを思い起すが、その母親は貴婦人となって、椅子に足を組んで、私とこやかに話している。

久しぶりで会った大人同志の会話はつきることがない。大人の会話が熱が入ってくると、小さい子どもはむずかたり要求したりすることが多くなる。こういうときに米国人の若い夫婦の家庭ではどうするだろうかと私は関心をもって見ていた。若い父親がいつのまにか会話の中から消えている。気がついてみると、玄関の前の芝生の上で、子どもとところがって遊んでいるのが窓から見える。三十分ほどすると、いつのまにかまた、会話の中に加わっている。しばらくして、また子どもがむずかridすと、こんどは、おばあさんに当るN氏の夫人が、子どもを地下室の洗濯場につれていって遊んでいる。そしてしばらくしてもどつてくると、

母親が軽食の用意をして交代するという工合である。客の前だからというので子どもをだまらせるのではなく、叱るのでもなく、子どもも客も両方も公平に、一緒につきあっている。こういう点は、日本人の家庭も、外国人の家庭もかわりはない。

食卓の席で、だれかが私に、パミツンブネスー許容的ということはどう思うかとたずねた。何年か前に米国でこのことが多くの人々の議論に上ったことがあるという。私は、それは何々主義というような問題ではなく、そのときに子どもがしていることに価値を認めるかどうかという問題である。たとえば、さっきナタニエルが大きな声をあげて、ボールを投げて遊んだが、彼にとつてそれは喜びであり、生きがいであると思う。私は彼がそれをすることはだじなことだと思つたと語つた。メアリーアンは直ちに、自分はその考えに賛成だといつてうなずいた。

前回私がこの同じ町を訪れてから三年たらずの間に、私の友人の中にも変化があった。私が親しくしていた、九十歳になるC夫人は、この間に亡くなった。その時に、老人ホームに私をつれていって下さったT夫妻を前にして、奥さんの前だからT氏にキスすることは遠慮するが、あなたにはキスしようといつて、車椅子の中で私を抱擁して喜んで下さった。同じ町を訪ねて、親しい人が欠けているのは、物足りない寂しい思いがするが、前回の時に

再び会うことができたのは幸いなことだつたと思つた。その他、私の親しい何人かの人たちが、人生の後半生で、境遇の変化を経験している。こういう友人たちと旧交を温めて、その間のつもる話をいろいろと聞いているうちに、五日間の滞在期間はたちまち過ぎてしまった。

ミネアポリスを離れる前日の朝、私は大学時代の恩師の一人であるテンプリン教授に、朝食に招待された。テンプリン先生は、女性の心理学者であり、長年、言語発達分野で丹念な研究をしてこられた研究者である。学生のひとりひとりと親しく交わり、私的なことまでも親切に世話をされる方である。三年前にもお会いしたこともあり、夏休みのだじな研究時間を煩わしては申し訳ないと思つたので、予告もせずに、大学の研究室を訪問した。予想したように、大学には来ておられなかった。手紙を書いてセクレタリーに渡し、大学の中をあちこちまわつて、一時間ほどして、大学の門の前の本屋で本を見ていた。すると、突然、私の前に、先刻のセクレタリーがあらわれて、テンプリン教授に私の訪問を電話で告げたところ、大変に残念がり、是非、会いたいから電話するようにとの伝言を伝えてくれた。探し当てられたことを感謝し、テンプリン先生と電話で話し、私も予定が一杯なので、遂に朝食に招待されることになつたのである。

書斎には、回転椅子を回せば、タイプライターとミシンとに直ちに手が届くように配置されているのは、女性の学者らしく、温かみがあった。年寄られたご母堂のことなどいろいろ語られ、また、停年までの数年間の研究の抱負を熱意をこめて話された。その中で、赤ん坊のときから成人するまでの言語発達の縦断研究の被験者のひとりひとりの資料を、自分の目で見直してみたいということをいわれ、児童心理学者は、子どもそのものに対する関心が研究の出発点になっているので、統計的処理以前のなまの資料に帰ってくるのであることを語られた。そして、停年になったら、もう一つ、やりたい仕事は児童文学だと、美しい白髪の中に眼を輝やかしておられた。私も自分の抱負をこもこも語るうちに、時間はたちまち過ぎて、次の約束の時間となってしまった。

前にも記したように、今回は、私の古い友人たちとの三度目の出会いであった。一度目は、私の学生時代であり、その人々と共同の生活の中で、さまざまなできごとや困難な事態などもあり、夢中で過ごした日々であった。二度目は、長年の期間をおいて、ほとんど、再び会うことはないのではないかと互いに思っているときに恵まれた再会であった。そして、今回の三度目の再会では、日常は互いに離れていても、いつでも、共に実在している存

在であることを確認したことが、その意義ではなかったかといまのところ考えている。初会、再会、三会、それぞれ、その中には顔を合わせる回数はいくさんふくまれているので、これはかならずしも、頻度としての回数による分類ではない。その間に長期の別離があったり、大きなできごとや境遇の変化などがふくまれると、その次には、前とは異質の出会いとなるのだろう。

初めての新鮮な出会いの中には、後のちまで引きつづいてそこにもどってくるような多くのたいせつなことから源泉がある。青年期は、そのような意味で、重要な時期であるし、また、初心にもどれるような、新鮮な経験をもった人は恵まれた人であると思う。そして、まだ意識も明瞭でない、幼少期の経験の中には、人生のずっと後にまでつづくような、さらに根源的なものがふくまれているのだと思う。こんなことをいろいろと考えながら、親しい人々と別れを告げて、ミネアポリスの空港を飛び立った。

帰路、サンディエゴに住む卒業生のAさんの家に寄ったとき、若い物理学者として政府の原子力研究所で研究しておられるご主人のリーさんは、一九九九年に開設予定の設備のための研究に目下専念しておられることを語られた。ここでも私は、大きな単位の時間の中で見ていくことを語られた。ここでも私は、大きな単位の